閻魔堂（当田町）

当田町の四つ角に閻魔堂があり、その中には地獄界の十大王といって、閻魔大王をいれて十人の裁判官が座っておられます。

昔から、善いことをしてきた人は極楽へ行き、悪いことをした人は地獄へ落ちると言い伝えられています

人は死ぬと行く手に暗い道が続いており、その道をどんどん歩いて行くと、目の前がパッと明るく開けて、※注① 三途の川が見えてきます。

賽の河原では、罪やけがれのない幼い子が、

一つ積んでは父のため

二つ積んでは母のため

三つ積んでは・・・・

追善供養の回向をする

と唱えながら、石を積んでいます。

その三途の川の向こうに、きれいなお花畑があるので、

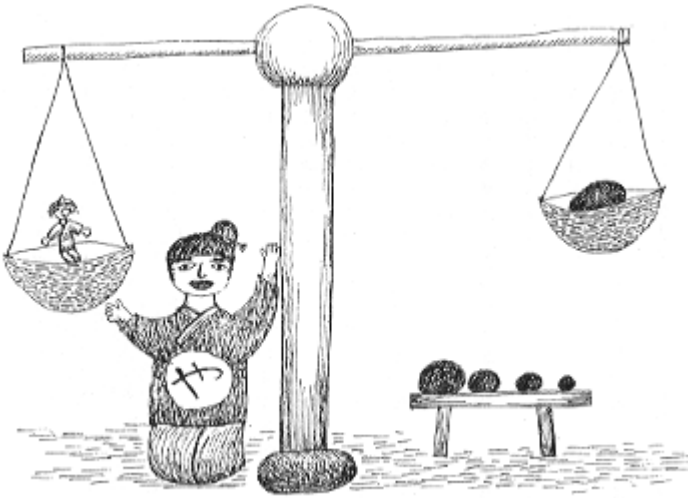
「ああ、あそこが話にきく極楽やろうな。極楽へ行きたい。」

と願って一生懸命に歩きますが、どうしても三途の川を渡ることができません。

そのうちに大きく口のさけたやり手ばばあが片足を立てて待ち構えているのに出会います。

「やい、ここは地獄の一丁目じゃ。さっさと裸に

なってこのはかりに乗れ。」
と、すごい剣幕で死者の着物をはぎとり、天びんばかりに乗せてしまいます。
「うらは、なあもわりい（悪い）ことはしてえん」と泣きわめいても、死者の罪の重さで下がる不思議な天びんばかりで、うそはつけません。
罪を犯した死者は地獄へ送られます。
この地獄では、十人の仏様が魔王に姿をかえられて、悪いことをしてきた人間に苦しみを与えて心を改めさせ極楽へ行けるようにと反省を促します。
十人の大王には、それぞれに名前があって役割もはっきり決まっています。
その地位というか偉さでは、みんなが一緒。顔形もやさしく似たようなお顔で、頭には冠のような帽子をかぶっておられます。
それでも、なぜか閻魔大王だけは、黒い服を着て目はつり上がり、中国の裁判官のスタイルをし



ていて、取り調べも一番厳しいと言われます。

裁判日	魔王	仏
初七日	しん広王	不動明王
二七日	初江王	釈迦如来
三七日	そう帝王	文殊菩薩
四七日	五官王	普賢菩薩
五七日	閻魔大王	地蔵菩薩
六七日	変成王	弥勒菩薩
七七日	泰山王	薬師如来
百か日	平等王	観世音菩薩
一周忌	都市王	勢至菩薩
三回忌	五違転輪王	阿弥陀如来

初七日（しん広王）、二七日（初江王）、三七日（そう帝王）、四七日（五官王）、と裁きを受けてきた死者は、五七日目に閻魔大王の前に連れ出されます。

「うらは、なあもわりい（悪い）ことはしてきぇんせん。」

と言うと、閻魔大王は※注②閻魔帳を開いて

「天平元年十月十日、神社のおさい銭を盗んだと書いてあるが、どうじゃ。」

「うらは、ほんな恐れ多いことはしてえんせん。」

「本当か。」

「ほんとに、ほんと、うそはつけんせん。」

「では、この鏡を見よ。」

と、閻魔大王はそばの大きな鏡を指さします。

鏡の中には、おさい銭を盗んでいる自分の姿が写し出されています。

「このうそつきめが。お前の舌が悪い。その悪い舌を抜いてしまえ。」

と鬼に命じます。

地獄界では不思議なことに、抜かれた舌の後から、また新しい舌が生えてくると言われています。うそをつく心が直るまで、下は何回も抜かれます。

このような裁判が、次から次へと続きますが、

三十三回忌を過ぎると、死者はみんな善人になって極楽へ行けます。

毎年、七月十六日は地獄の休日で、地獄の釜のふたが開く日と言い伝えられているので、盆にお墓参りをして、先祖の供養をしています。

この教えは、中国から伝わり、平安中期に全国に広まりました。

さずかった命を大切にして、善いことを進んで行い、悪いことはしないようにとの願いをこめて閻魔堂は、安政初年に小島長之助さんを中心に、村の人達も力をあわせて建てられました。

二十三日は、えんまさんの日といって、今でも毎月この日に、お参りが続けられています。

※注①　三途の川

死んだ人が、あの世へ行く途中で渡るという川

※注②　閻魔帳

閻魔王が、死んだ人の生前に行ったすべてのことしるしておくという帳面